

カルヴァンとユマニスム

——昭和52年度始業講演（文理学部）——

久米 あ つ み

1) ルネサンスと宗教改革

16世紀，それは宗教改革の時代である。またフランスにおいては，イタリアにおくれてはじまったルネサンスの時代である。

ところでフランスのルネサンスは，ユマニスムと宗教改革を生み出したといわれる（たとえば『渡辺一夫著作集』5，212頁参照）。いい方を変えて，ルネサンス期にこの二つの流れが生れたといってもよい。なぜ，フランスにおいてこのことがとくにいわれるのか。またこの二つの関係はどんなものか。それを考えることが本日の講演の趣旨でもある。

Renaissance とは読んで字の如く ^{再 生} re-naissance である。古代文芸の復興・再生を通して，人間の元来あったはずの姿を取りもどそうとする運動が，フランスでは古典文学の原典復刻とともに，あるいはより大なる熱心さをもって聖書の原典復刻の作業へと人々を駆り立てた。なぜだろうか？ うち続くイタリア戦争（1494—1559）や疾病の流行などから生ずる不安と疲弊の故か？ 人間の条件や救いをことに関心の対象とする北ヨーロッパの思潮の特长に由来するものか？ ひろく文学といわれる文字による学問・芸術をとりわけ尊重するフランスの国民性によるものか？ ともあれ，救いはどこにあるか，救われるためには何をしたらよいかという，きわめて個人的・内的問いは，国民ひとりひとりの胸に湧き起っていたのである。このきわめて緊急な問題に答え得るのは，当時教会でもなく，学者の群れ集う大学でもなかつ

た。人々のうちあるものは不信仰に走り、ある者は異端に走った。しかしある者はキリスト教を建て直すことによって救いを得ようとした。このキリスト教の再興を思想的に行おうとした人々は、キリスト教哲学というものを考えた。ギリシア哲学とキリスト教を一致させようと考えた人もあり、聖書自身の中に哲学的な基礎を見出だそうとした人もあるが、とにかくキリスト教の教え自体の中に、それも教会の伝承や権威を通してではなく聖書に直接触れることによって救いの根拠をみつけようとした人々は多くいたのである。

一方、humanisme とは何か。この語は渡辺一夫先生も述べておられるように、1765年頃から humanitisme 一人類愛—として存在した。その後忘れられた時期があり、1877年頃から再び姿をみせるが、こんどはドイツ語の Humanismus のフランス語化したものとして使われる。さかのぼって16世紀においては humaniste すなわち lettré（文芸に通じた人、学者）の意で使われている。モンテーニュは『随想録』Ⅰ,56 でこの語を「神学者」théologien と対比して用いている。

さてユマニスムの中にもいろいろあることは御承知の通りであるが、16世紀の人文主義的ユマニスムの源泉は、プラトンとともにキケロ、セネカあたりに主として求められる。その源泉の一であるキケロは、「他の人々は人間と呼ばれている。だがわれわれのうち、フマニタスにふさわしい学問によって自己形成をした人びとだけが人間と呼ばれるのである」*De Res Publica* 1,28という。この humanitas 即ち教養が、人間にふさわしい在り方、人間の尊厳を意味するわけである。

そして16世紀のユマニストたちが復興しようとした学芸は古典学, litterae humaniores であった。直訳すれば、「より人間的な文芸」ということになる。この「より人間的」という比較級を心に留めておこう。

フランソワ・ラブレーは『第二之書 パンタグリユエル』（1532年）8章の中で、巨人王ガルガンチュワをしてパリ滞在中の息子パンタグリユエルに次のような書簡を書き送らせている。「……今や一切の学問は復旧せしめら

れ、諸々の言語研究も再興せしめられ候。即ち、ギリシヤ語。これを知らずして自ら学者と名乗るは恥辱にござ候。またヘブライ語、カルデヤ語、ラテン語に候。……拙者としては、そなたが諸々の言語を完璧に学ばるるよう切に希望いたし居り候。第一には……ギリシヤ語に候。第二には、ラテン語。更にまた聖書読解のためには、ギリシヤ語にあつてはプラトンを、ラテン語においてはキケロを学ばれたく存じ候。」(渡辺一夫訳)そして父王は、幾何学、算術、音楽のごとき自由学芸もつづけてこれを修めるべきこと、天文学、民法、自然の事物の考究、医学とくに人体解剖の必要性を説いたのち、「一日の数時間を先ず聖書の考究に当てられたく、第一に、ギリシヤ語にて『新約聖書』ならびに諸々の使徒の手になる『書』を、これに次いで、ヘブライ語にて『旧約聖書』を繙かれたく候」といっている。語学がいかに重んじられているか、事物とのじかの触れ合い、解剖や実験の学がいかに新鮮な喜びをもたらしているか、そして聖書という原典を読むことが学問の主目標のひとつとなっていることが、この書簡から読み取られる。

2) ユマニスト カルヴァン

ジャン・カルヴァン Jean Calvin はピカルディーに生まれてスイスのジュネーヴに歿した宗教改革者、ラブレールとは同時代の人である。生まれ故郷のノワイヨンをつり出しに、パリ、オルレアン、ブルジュ、そしてふたたびパリで、当時としては最高の、しかも典型的にユマニストとしての教育を受けたカルヴァンは、1532年にはセネカ『寛仁論』の註解を著し、ユマニストとしてまさに出発しようとしていたそのとき、「突然の回心」を経験して福音主義陣営に走ったといわれる。しかしカルヴァンがつくった二つのアカデミー、ローザンヌ大学とジュネーヴ大学の教科内容は、まさしくユマニズムの原理に沿ったものなのである。

まずコレージュの初年級(第5級)ではラテン語文法がたたきこまれる。構文の勉強はヴィルギリウスとキケロからの文例によってなされ、文体の練習は古代作家の文章を手本として行われる。第4級でギリシア語がはじま

る。第3級ではキケロ、ヴィルギリウス、カエサル『ガリヤ戦記』等の註解がなされ、学生たちは羅文希訳の勉強もする。第2級ではクセノフォンその他の歴史家の書によって歴史が教えられ、ホメロスが読まれ、またキケロの演説を使って弁論術が教えられた。第1級ではキケロ、デモステネスによって修辞学が教えられた。このように古典研究を身につけたのち、神学や法学、医学の研究をはじめるのであるが、たとえば神学生は旧約聖書の註釈書を読みつつヘブル語を学ぶ一方では、プラトン、アリストテレス、プルタルコス、キケロ等の作家の選文集によって、ギリシア語とラテン語を仕上げるといったふうであった。このことから、カルヴァンが終生ユマニズムを重んじていたことがわかる。

私たちが今日ユマニストと呼んでいる人々、たとえばデシデリウス・エラスムス Desiderius Erasmus(1469?—1536)やギヨーム・ビュデ Guillaume Budé (1468—1540) は、ギリシアやローマの文芸を学ぶことが、キリスト教の福音を学ぶよき準備になると考えた。また歴史的研究や、文献学・言語学 (philologie) の方法が、古典研究に役立つばかりでなく、聖書を読む際にも適用されると考えた。カルヴァンもまた、古代文芸への傾倒と教会教父とくにアウグスチヌスへの共感から、ユマニズムに入って行った。彼の処女作『セネカ「寛仁論」註解』は、若きユマニストの面目を発揮したものである。暴君ネロに対して寛仁を説くストア哲学者セネカの書を註解しつつ、青年は古今東西にわたる博識と、修辞学に対する強い関心、精密な批評力などを見せている。自費出版されたこの書は、当時ほとんど人々の注意を惹かなかった。人目を惹くほどの独創性がなかったせいでもあろう。全体を通じてどこやら啓蒙的な、読者を下に見るような調子がただよっているのも、先輩たちには気に入られなかったかもしれぬ。しかしカルヴァンは彼なりに、言うべきことをちゃんと言っているのである。彼はストア哲学者に学びつつも、ストア哲学を無条件でみとめているわけではない。第2巻第4章でユマニストは、憐みや感動に対するストア風の考えを真向から非難し、次のように言うのである。

私たちはこのことを確信すべきである。すなわち、憐みは徳であり、なんの憐みも感じない人は良い人間ではあり得ない。たとえこれら役立たずの賢者どもが、蒙昧の中で何を論じていようともプリニウスの言葉を借りるなら、「私は彼らが賢いかどうかは知らぬが、彼らが人間でないことはたしかだ。なぜなら人間の本性とは悲しみに打たれ、感じ、これに抵抗したりし、また慰めを受け入れることであって、それを拒むことではない」。昔アテネ人が「慈悲」のために祭壇を設けたのは故ないことではなかったのだ。

また権威の所在について、ユマニストは明確な発言をしている。第1巻第1章で、君主は神々の代理人であるというセネカのテキストについて、カルヴァンはホメロス、プリニウス、プルタルコスなどを引いたあと、こうするのである。

また私たちの宗教の告白するところはこうである。「神によらぬ権力はない。そして今ある権力は神によって定められたものである」（ローマ人への手紙13章）と。

ドゥメルグはこの句をストア思想とキリスト教信仰の対立と見、ヴァンデルは調和と見ている。おそらく後者の見解が正しいと思われるが、この他にもユマニストがセネカを註解しつつキリスト教と対比しようとしている個所は多くある。またカルヴァンは、ギリシア・ローマの文化といえほとんど神聖視さえされていたルネサンス期にあって、君主を神々の列に祭り上げるローマ人の風習を笑うべきものといい、当時の風潮からも独立した精神の持ち主であることを示しているのである。

この書を出版したのちのカルヴァンは、パリで何をしていたのか。すでに福音主義者たちと交わり、秘密の集会に出入りしていたことを推測させる手

紙が何通か残されている。彼の名が歴史に躍り出るのは1533年11月1日、万聖節の日のことである。この日パリ大学はマチューラン教会において総長の演説を行うのを恒例としていた。新しくパリ大学総長となったニコラ・コップ Nicolas Cop（フランソワ I 世の侍医ギヨーム・コップの息子）はモンテーギュ学寮時代からカルヴァンと親しい交わりを結んでいたが、演説作製に当ってカルヴァンの助言を仰いだのである。現在カルヴァン自身の筆蹟によるコップ演説の下書をめぐって、草稿を作ったのがカルヴァンであるか、コップの演説をカルヴァンが写してこれに手を加えたものか、といろいろの説が立てられているが、ともかくカルヴァンの参加は疑いない。さて当日コップのした演説は、まったく福音主義の原理につらぬかれたものであった。テキストをマタイによる福音書5章の「幸いなるかな心の貧しき者」に取った演説者は、諸聖人のとりなしや教会の権威などにはいっさいふれず、キリストのみを仲保者とする真の救いについて語る。涙する人々が幸いであると宣言されるのは、彼らが自分の力に絶望し、神の義にのみ望みを抱くからである。神の無償の贖いの救理を否定すること、それは偶像礼拝にほかならないのだ。

現代の私たちからはどこがどのように革命的であるかわからないこの演説は、ルター主義そのものの表明として、大学当局を震撼させたという。まもなくコップは最高法院に告発され、最高法院への出頭を命じられるが、当時出頭とは逮捕、断罪にただちにつながるものであったから、身の危険を感じたコップはバーゼルへと亡命する。ついでカルヴァンにも逮捕の命が出されたが、危うく逃れたカルヴァンはぶどう作りに変装して、流浪の旅へと出立する。各地をめぐっていったんパリにもどったカルヴァンは1534年10月、かの檄文事件 Affaire des placards に遭逢して、今度は決定的にバーゼルに亡命せざるを得なくなる。この檄文事件というのは、1534年10月17日から18日にかけて、パリをはじめ、ブロワ、オルレヤンなど諸処に、またアンボワーズ離宮にいたフランソワ I 世の寝室の扉や、王の「手帛を入れる鉢」の中に至るまで、ローマ教会のミサを批判し、その誤謬と腐敗とを弾劾したビラが撒き

散らされていた事件で、犯人グループの割り出しも出来ぬまま、国を挙げての大騒動となってしまった。王は1535年1月には盛大な贖罪行列に参加し、つづいてルター派を庇護したりかくまうことを厳禁する勅令を出すなど、急速に新教徒弾圧政策へと傾く。最高法院は大々的弾圧を開始し、おびただしい数の絞首刑と火刑が行われた。バーゼルに逃れたカルヴァンは、はじめ信徒向けの信仰の手引書を作るつもりで『キリスト教綱要』を執筆しはじめたが、次々と伝えられてくる同志の悲報、とくにも新教徒に課せられた「叛逆の徒」ないし「暴徒」などのいわれなき汚名を聞かされ、途中から構想を変えて福音主義擁護の書としてこれを書き上げた。最初に出版された1536年のラテン語版は、6章516ページよりなる小型本であったが、カルヴァンはその後フランス語版、ラテン語版と絶え間なく改訂をつづけ、1559年（ラテン語）、1560年（フランス語）の最終版においては、4巻80章より成る大著に完成させたのである。

3) 神学者カルヴァン

この歴大な書物を通してカルヴァンは何を語っているのか。ひとことでいうならこれは、神と人との動的関係を語っている書物である。つまりカルヴァンは、人間をたえず神との関係においてとらえようとした。そしてその関係をとらえるのは理性的認識によってである。

『キリスト教綱要』最終版の冒頭は、次のことばによって飾られている。

我々の知恵は、それが真実また真正の知恵といわれるにふさわしいものであるかぎり、ほとんどすべて、二つの部分から成る。すなわち、神を認識するとき、我々人間は各自、みずからを認識するのである。

このことばは知恵についてのキケロの定義「知恵とは天的および地的なものの認識である」や、ビュデのことばである「神は私たちがどんな種類の教えによってであれ、彼自身と私たち自身の認識に導かれるように望む」を思

わせる。じっさい、ビュデはこのことばを、1535年に刊行した『ヘレニズムからキリスト教への移行』の中で言っているのだが、カルヴァンがこの書から受けた影響はきわめて大きかったと考えられる。

神と人についての認識から論じはじめるカルヴァンは、人間を神の「製作物」、ただし「神を認識するという条件の下に生れかつ生きる」ものとしてとらえる。人間の中には生来的に「宗教の種子」が播かれているという表現は、この認識能力をよくあらわしている。

他の点では獣と少しもかわらないようにみえる者たちも、なにかしら宗教の種子といったものをもっている。(『綱要』Ⅰ，3，1)

しかしカルヴァンは、神についての認識は人間が墮落してしまった現在、理性によってはもはや出来ないということをくり返し述べる。そしてこの世の哲学者が理性を人間の生の支配者と考えるのに対して、「キリスト教哲学は理性が譲歩し、聖霊に座をゆずるため退くようにと欲する」のだという。このような考え方は、人間が自身の意志によって神との関係を破った以上、現在の人間は救われる望みも資格も、まったくないという原罪観、またそれにもかかわらずこの破壊しつくされた「神の像」を回復しようとして神がキリストをつかわし、キリストをして再創造のわざを遂行せしめるのだというキリスト信仰を基とし、かぎりない謙遜の思いへと人を導く。つまりこのような信仰からは神に対する完全な自己放棄が生まれて来る。これは「より人間的なるもの」即ち善であるとして、自己の拡大をめざすユマニストとは一線を劃す点である。たとえばエラスムスは、アダムの墮罪のときにも、人間には善を行なう自由意志がいくばくかは残されていると考え、それゆえにこそこの自由意志を正しく導き、育てて行くならば救いの道に到ることもできようと考えたのに対し、改革者たちは自由意志をふくめて人間の善性はいったん完全に破壊されてしまった、と考えるのである。この、自分自身を無であると感じる深刻な原罪体験から、救いはキリストによる身代りの行為によるほか

ないという、贖罪の信仰が生まれて来る。

カルヴァンの人間観は、人間を創造——墮落——再創造という歴史の中でとらえる、きわめて動的なものである。そしてかの「予定」*prédestination*の教理は、キリストによる再創造のわざとして置かれたものである。人類全体が、神の救いにふさわしくない墮落の状態にあるのだから、その中からだれをえらび、だれを捨て置くかはまったく神の計画によること、神の恩恵のあらわれに他ならないからである。

えらびの目的は、我々が、子らとして神に受け入れられ、神の恩恵と慈愛によって救いと不滅とを得ることではなくて何であろうか。（『綱要』Ⅲ，24，5）

このような人間観はまったく神中心のものであり、人間中心に世界を考えて行くユマニストの行き方とは相容れないものがあるかもしれない。たしかにカルヴァンは、ユマニストたち（後年のカルヴァンによればニコデモの徒）からは決定的に別れて行った。しかし彼が離れて行ったのは「ユマニストたち」からであって、ユマニズムからではない。彼の教育プログラムがユマニズムのそれであったことは前に述べた通りだが、彼の思想そのものも、人間とは何かという深い問いである以上、ユマニズムと無縁のものとはどうてい言い得ない、いな新しいユマニズムをめざしたものと言えるのである。